[フィナンシャル ジャパン]
FJ
FINANCIAL JAPAN
2005年6月1日発行　毎月1回1日発行　第2巻第6号
6
June 2005

[第1特集]
「営業幹部」は燃えているか

[第2特集]
予防医学の時代

「株式投資に成功する人、しない人」の法則

M&A革命
「買う側の論理」はこうなっている

安藤忠雄×岡田武史 対談
「たかが建築、たかがサッカー」と言うなかれ

キッコーマン
茂木友三郎会長

[第1特集]

「営業幹部」は燃えているか

歯 The age of preventive medicine

あなたは「修復治療」の繰り返しで入れ歯になるか、
生涯自前の歯でいられる「予防歯科」を選ぶか

「先行投資」で虫歯・歯周病を制圧する

文・伊藤左知子／写真・増田智泰
written by Sachiko Ito, photographed by Tomoyasu Masuda

誰しも健康で長生きはしたいもの。「ぴんぴんころり」が理想ならば、まずは自前の「歯」の維持を心がけたい。歯の健康維持はそのまま心身すべての健康と美につながるからだ。「自前の歯」でいつづけることの大切さを説き、カウンセリングを通して、ゲストにとって現時点でもっともふさわしい治療法を提案し、継続的な予防と健康維持の認識をも提供する「クリニーク デュボワ」の取り組みを紹介する。

虫歯が減らないわけは医療にあった

世界保健機関（WHO）が二〇〇三年度に発表した資料によれば、日本人の平均寿命は八一・九歳と世界でもトップである。そんな長寿大国にもかかわらず、日本人の歯の健康状態は良好とはいいがたい。

アメリカやヨーロッパ諸国に比べて、日本人の虫歯保有率は極めて高く、平成一一年歯科疾患実態調査によれば、一一歳で五八%、一四歳で八五%、二〇～二四歳では、すでに九六%の人が虫歯になっているのだ。また五〇歳以上の二人に一人が、歯周病にかかっているともいわれる。

そうした状況を危惧して、国も一九八九年から「八〇歳になっても自分の歯を二〇本以上保とう」という「8020運動」を提唱しているが、八〇歳で二〇本以上の歯を保有している人の率はいまだに一五%で、一〇年以上たった今でも目標の二〇%に満たないのが現状だ。

日本人は虫歯や歯周病から逃れることはできないのだろうか。

「多くの人たちが、虫歯や歯周病になるのはしょうがないという概念を持っていますが、それは誤った認識です。すでに歯周病も虫歯も制圧できるものなのです」

そう語るのは、クリニーク デュボワの院長、中原悦夫氏である。虫歯も歯周病も細菌感染で起こる病気なので、細菌を徹底的にコントロールすれば虫歯や歯周病は起こらない。

写真右は最先端歯科設備の中の一つ。デュボワでは、解析度と読影診断の精度を追求したデジタルX線画像診断システムを導入している。放射線量が従来のレントゲンの10分の1という画期的なレントゲンで、現像プロセスがなく、被写体像がモニターにダイレクトに現れる。診療時間の効率化が高められ、ゲストとのインフォームドコンセントがより深められる。写真左は、黄色いサークルが印象的な天井を治療室から望んだイメージ。デュボワでは、放射線室などを除き、各治療設備のあるエリアを天井までの壁で仕切ることをあえてしていない。デュボワのエリア共通の黄色い天井が見えることで、ゲストの閉塞感や不安感を極力緩和するように工夫している。

しかし、こうした予防治療を日本の歯科医院では積極的に行っていない。

「これまでの歯科医療は、治療はするけれども、予防はしないというものです。そのため治療しても、その直後から虫歯菌に冒されてしまう。そして何度も治療を繰り返していくうちに、小さい虫歯がだんだん大きくなり、最終的には抜いて、インプラントや入れ歯にせざるを得ない、ということになるわけです」(中原院長)

それでは、なぜ歯科医は予防をしないのか。それは保険医療制度の枠外だからである。

中原院長は、こうした旧態依然の医療制度の枠内では、理想の歯科医療を行うことができないと感じ、保険医の登録を自ら返還した。そして歯科医師のライセンスだけを頼りに、予防と審美を兼ね備えた新しい「審美歯科」の分野を開拓してきたのである。そして二〇〇三年、東京・日比谷の帝国ホテルプラザに、これまでにないデンタルエステティック「クリニーク デュボワ」を開業した。

治療前のカウンセリングが重要

審美歯科治療というと、外面だけを美しく整える治療と思われがちだが、デュボワの概念はそれとはまったく異なる。

「究極の審美とは、自分が持って生まれた歯を白いまま、美しい形で生涯保ち続けることです。歯を人工的に白くしたり、歯を抜いて矯正することが審美だと思っている人がいますが、そうではありません。われわれは天然の歯と変わらないものを作る技術を持っています。しかし、それと天然の歯を比較して、どちらがいいかということです。どんなにいいセラミックで二〇年以上もつ歯を作れたとしても、天然歯のように唾液で再石灰化されるわけでも、神経が通うわけでもありませんからね」(中原院長)

デュボワでは、こうした審美歯科に対する誤った認識を正し、ゲストにとっての真のソリューションを提案することから、ゲストとの対話が始まる。そしてまず行われるのは医師によるカウンセリングである。

「まず相談内容や症状をじっくり聞きます。たとえば、歯が欠けてみっともないからすぐに治してほしいという場合でも、どうして欠けたのかをまず考えていく。殴られたとか事故の場合は別ですが、過去に遡って聞けば根本原因が何かわかる。その上で治療方法を考えなければ、また同じことを繰り返してしまうわけです」(中原院長)

再生療法や移植など、高度な治療を行う手術室。感染予防対策の向上を考えて造られた。天井にある装置は、診療室内を無菌状態に保つためのエアカーテンシステム。半径2m以内を無菌状態に保つ。日本の歯科ではデュボアが初めて同システムを導入した。手術室内では24倍までに拡大するドイツ製の医療用顕微鏡を使い、手術を念入りに行う。いい治療といわれるものでも細菌の制圧には500μ程度の誤差はあるが、デュボワでは細菌レベルを通常50μ以下に抑え、10μレベルまで制圧できている。複数のドクターが判断できるように手術の様子が大画面モニターに投射される仕組みをとるほか、歯を削ると飛び散る目に見えない粉塵や水を吸収するフリーアームフォルテなど最新歯科治療設備を揃える。

完全個室の椅子はゲストに音楽が聞こえるようになっており、ゲストのリラックス効果を高めている。同個室では、主に歯の健康レベルが「A」の人を対象に歯の定期予防のためのクリーニングやリラクセーションのためのデント・フェイシャルマッサージを行う。個室なので排煙を完璧にし、アロマテラピーを施すほか、出張ネイルサロンからネイルケアサービスも提供。

カウンセリング後は、口腔内のすみずみまで精密検査を行う。口内細菌も最低七種、歯周病菌五種類と虫歯の原因菌二種類を調べる。細菌の種類は他にもあるが、代表的な細菌を調べることで、だいたいの傾向がわかってくるそうだ。

それらの検査結果をもとに、ようやく治療計画が提案される。また、ゲストは検査結果により、A(健康レベル)、B(半健康レベル)、C(疾病レベル)の三つのカテゴリーに分けられ、それぞれに合った治療計画が提案される。

歯科医師と歯科衛生士が対等な立場で長くサポート

治療では、まず口内細菌を除去する予防(リスクコントロール)が優先して行われる。口腔内の状態がよくなったら、治療に進む。治療にはゲスト一人に対して、最低四人から六人の医師が携わるという。外科、矯正、歯科麻酔など、それぞれの専門医がいて状態に応じた治療を適宜行うのである。

そうした計画診療を総合診断医がコントロールする。歯科衛生士は通常、医師の指導の下で助手を行う印象だが、デュボワでは独立して仕事を任されている。医師のカウンセリング後、窓口となってゲストともっとも長い時間付き合うのは、この歯科衛生士となる。

「私たちはゲストに、ご自身の身体という組織を運営する代表者という意識を持って取り組んでいただくよう、アプローチします。どんなに高度な医療を提供しても、ご自身のやる気がなければ、よくはなりませんし、健康状態を維持することもできません。それに対して、ゲストのモチベーションが落ちないようにサポートしていくのは特別なトレーニングを受けたデュボワの歯科衛生士です」(中原院長)

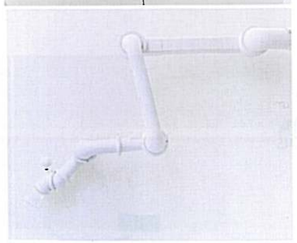
治療後は定期的なチェックとクリーニング。ゲストの生活習慣にも留意しなければならない。

「生活習慣でもっとも大切なのは食事回数。おやつを含めて一日四回までとし、食後はすぐに歯を磨く。それ以上間食をしても、歯を磨けばかまいませんが、食べていない時間に歯は再石灰化しやすいので、間食は少ないほうがいい」(中原院長)

ちょっと飲むくらいなら、かまわないだろうと思うかもしれないが、実はコーヒーやジュースなどが一番いけないという。

「歯が再石灰化しやすいのは、口腔内のpH値が七以上のとき。唾液がよく出て歯をコーティングしてくれます。逆に危険なのはpH値五・五以下の状態。食べたり飲んだりすると、口の中はすぐに五・五以下に落ちます。五・五以下の時間が二四時間中一二時間あれば、虫歯や歯周病のリスクはかなり高い。それ以上であれば、ほとんど確実に虫歯になるといえます」(中原院長)

だらだら間食を続けている口の中は、夏場の生ゴミを入れた三角コーナーと同じようなものとか。そう言われると、いかに危険か想像できる



写真上は手術室の前にある消毒スペース兼ダスター。掛かっているタオルは左からダスタータオル、真ん中はグローブをした手を拭くための薬液を含ませたタオル。右端が消毒あとに素手を拭くタオルになっている。
写真中は歯を削ると飛び散る目に見えない粉塵や水を吸収するフリーアームフォルテ。治療室に設置されている。デュボワでは院内感染を防ぐ意味で細菌予防衛生には極力気を使っている。
写真下はハンズフリーの頭部装着式デンタルルーペ。デュボワでは手術や治療の間はこのルーペを装着するほか、歯科医や衛生士を含めた全スタッフが骨伝導のインカムを通して全員が無線で情報を共有できるシステムにしている。

というもの。こうした指導も歯科衛生士が行う。

予防に投資し、歯を保つ

なにもかもが、今までの歯科医院では考えられないことばかりだが、それはサービス面においても同様だ。たとえば、帝国ホテルプラザとの提携により実現した宿泊治療プラン。長時間の治療や手術を、宿泊しながら一気に完了させることができる。

またスタッフ全員がインカムを付けて、同時に院内の状況を把握できるというシステムは、航空業界から着想を得たものだとか。人づての確認作業と違い、間違いが起こらない。

こうしたホテル業界のホスピタリティや航空業界のリスクマネジメントといったノウハウを取り入れる発想はすべて中原院長による独自のもの。保険診療ではあり得ない魅力的なサービスばかりだが、費用はすべて自己負担。けっして安くない。

「これまでの修復作業を繰り返す歯科診療では、七年に一度は治療を行わなければならない。人生八〇年と考えても、一本の歯を一〇回くらいは繰り返し治療していることになります。歯は、親知らずを入れないで二八本ありますが、すべての治療を繰り返していれば、生涯で何百万円という費用がかかるわけです」（中原院長）

それだけの費用をかけて最終的に入れ歯になるのは無駄な話だが、同じ費用を先に投資することで生涯、自前の歯を保てるとしたら、決して高い先行投資ではない。中原院長によれば、最近は意識の高い人が増えているという。

以前は五割程度だった成約率が、二〜三年前から九割を超えるようになったというのも、うなずける話である。この調子でいけば、デュボワにおいては二〇年後には虫歯や歯周病の患者はいなくなるという。

その頃には、歯のケアと美容、そしてリラクセーションが主流になるとか。すでに未来を見据えてメディカルアロマセラピーやデント・フェイシャルマッサージなどのサービスも展開している。

どうやら白く美しい歯が芸能人だけの常識でなくなる日が、すぐそこまで来ているようだ。

写真左は帝国ホテルプラザ4階に構えるデュボワの受付。受付の机には予約管理システムがセットインされている。受付に入ると森の中に踏み入ったような癒しの空気を感じる。これは、ホテル内に設置されるマイナスイオンと光触媒による空気浄化ユニットによるものであるほかに、デュボワで使用するアロマセラピーによるもの。フランスの外科医、ジャン・バルネ氏考案のアロマオイルを使用する。花粉症に効くタイプのオイルが好評だという。写真右の部屋はカウンセリングルーム。ゲストの不安を取り除くための空間設計となっている。ここでゲストの初期カウンセリングのほか口腔内診断を行ったり、術後のゲストに麻酔が落ち着くまでひと休みしてもらったりする。隣の部屋にはドレッサーがセットインされ、ホテルのルームサービスも施される。診断結果を伝えるのは院長の個室。

クリニーク デュボワ理事長兼院長

中原悦夫

1959年山口県生まれ。84年日本歯科大学卒。87年より米国で審美歯科とマーケティングを学ぶ。89年より審美歯科および予防歯科の専門クリニック「協立歯科」を設立し、審美歯科とオーラルヘルスケアの普及を始める。92年アメリカ美容歯科学会より日本人で初の認定医となる。94年日本大学歯学部法医学教室より学位を受ける。2003年12月に自身のクリニックを医療法人社団 協立歯科 クリニーク デュボワと改称し、帝国ホテルプラザに新たにオープン。日本歯科漂白研究会など各種研究会や協会の役員なども務める。